

7月17日 あなたの目にオレンジ色（認知症支援のシンボルカラー）を！

西原町立図書館では、玄関前にオレンジ色の花を飾っています。この取り組みは、認知症に理解のあるやさしいまちづくりに取り組んでいる「西原町社会福祉協議会」に賛同し、行ったものです。花を見ることで認知症理解への一助になれば幸いです。



▲花の準備をした「サポートセンター はばたき」のメンバー

7月18日 未来を担う青少年 まっすぐ育て

第45回西原町青少年健全育成町民一斉行動の総決起大会がさわふじ未来ホールで開催され、小中高生・一般の意見発表が行われました。意見発表では、あいさつや友達との関わり大切さやAI時代における必要なスキルなどについて話され、来場者は熱心に耳を傾けていました。

佐藤礼子氏（パトラン西原グループ代表）による講演では、地域を歩いたり走ったりしながら、遅くまで外にいるこどもたちに声をかけたり、ゴミ拾いをして美化活動を行ったりするなど、地域の安心・安全を広げる活動についてのお話がありました。



のほら ひろと
野原大翔さん



あらかき あすみ
新垣恵美琉さん



こが こがしおりさん



しろまみなた
城間湊さん



くだか れあ
久高麗愛さん



よねやましゅうん
米山俊さん

7月19日 西原町戦跡めぐり

ニシバル歴史の会主催の戦後80年事業西原町戦跡めぐりが開催されました。町内外から集まった20名の参加者は、会員の池間一武氏の案内で、「月桃」の歌碑（西原運動公園交流広場）、西原の塔・旧西原村役場壕（字翁長）、小波津弾痕の残る石堀、96式15榴榴弾砲（西原町中央公民館裏）等をめぐり、最後に運玉森にのぼりました。山頂からは、西原町全体を望むことができるため、沖縄戦の激戦地を確認することもできました。参加者からは「西原町の歴史を知ることができた」との感想がありました。

西原町戦跡めぐりは、今月20日に同じルートで第2回を開催予定です。（詳細は生涯学習だよりをご覧ください）



▲被爆クスノキの説明をする
ガイドの池間氏



▲西原の塔の説明を聞く
参加者

7月22日 全国中学生選抜将棋選手権大会県代表派遣報告

中学生選抜将棋選手権大会沖縄県予選（女子の部）で優勝した當銘悠莉さん（西原東中学校3年）が、町役場を訪れ崎原町長に優勝報告と全国大会への意気込みを伝えました。

當銘さんは「全国大会は初挑戦だが、一局一局を大切に指していきたい」と話していました。崎原町長は「これまで培ったことや学んできたことを生かし、最後まで諦めず、頑張ってほしい」と激励しました。



8月10日 第3回西原子どもまつり

西原町子ども会育成連絡協議会主催による第3回子どもまつりが、西原町中央公民館で開催されました。

当日は、約700名の来場者がお化け屋敷、脱出ゲーム、エアー遊具、舞台で出し物（なわとび、エイサー、カラオケ大会）を楽しみ大盛況でした。無料食堂では、カレーとかき氷が提供され、来場者は美味しく食べていました。また、スタンプラリーを集めたこども達は、フルーツポンチと焼きそばがもらえるイベントにも参加していました。さらに、多くの企業からの協賛により豪華景品が当たる抽選会が行われ、こども達は楽しく大喜びしていました。



～ 戦後80年 記憶の継承 ～ No.1

沖縄戦の終戦から80年を迎えた今日、戦争体験者の減少、戦後世代の増加と相まって、戦争の歴史的教訓が年々風化し、その悲惨さが忘れ去られようとしています。

西原町は、戦争体験者の方々からの貴重な体験談を紹介し、次世代へ継承していきます。

「平和への証言」
あの時にタイムスリップして

新垣シゲ子（当時高等科の学生）
平成16年6月西原南小学校での講話

1944年10月10日、沖縄の那覇に空襲が始まりました。その時は、まさか戦争だとは思ってもみませんでした。しかし、西原方面も徐々に爆撃が激しくなり1945年3月、「住民は玉城村へ行きなさい。」との立ち退き命令がありました。しかし、両親と私たち姉妹7人家族は、玉城村へは行ったこともないので道を間違え大里村の方へ行ってしまいました。

5月頃でしょうか、「首里城が攻められたら沖縄はダメだ。」との噂が流れていました。それからの暮らしといえば、朝7時頃から夕方5時頃まで陸・海・空からどんどん弾が飛んできました。夜になると1日分の家族の食料である芋を炊き、闇に紛れて今日はこの部落、明日はあの部落へとあてもなくどんどんと追いやられ南の果てまで行きました。

途中、日本の負傷兵が座り込んでいて道行く人々に「お水下さい。お水下さい。」と、助けを求めているも誰もが自分のことで精一杯でしたので知らないふりをして通り過ぎるしかありませんでした。その兵隊は「お母さん、沖縄の土となっていくよ。」とわめいていました。しかし、あの頃の日本の教育は、天皇のため、国のため、と若い命を無駄にして本当に残酷でした。

戦争はまだまだ続いていて、何度か命拾いをしたこともありましたが。それから6月19日は1日中空襲でした。忘れもしません。6月20日の朝10時頃、近くの繁みにいた友達は航空機から直撃を受け即死したようだと言われましたが、もはや驚きや温情や悲しみに暮れる余裕もありませんでした。そして、その日の夕方、海岸の方から日本語で「住民は出て来い。」と声がし、その声はハワイ生まれの日系2世とのことでした。その呼びかけに私たちは、自分の村へ帰れると安心し20人くらいで山を下りようとしているとアメリカ兵が手まねで「来るな。」と静止したのです。なぜなら近くに潜む日本兵に向けて照準がされていたのです。にもかかわらず、母が第2人の手を引き歩き出したので、その後を追おうと歩みだした瞬間、戦車からの砲弾が2～30メートル先に落ちたかと思うと、爆風で私の身体は宙に舞い上がり、空中で両親や弟達の驚愕と同時に悲痛な目を見ました。

「もうこれで自分も死ぬんだ。」と思ったら落ちた所は畑でした。家族が私の周りに集まり、心配そうに顔を覗き込んだとき、私は「ナー、ワンネー死ンジョン。」と言うと、母は生きていと安心したのか、「クマウトーティ フンデーシーネー ナーヒン弾ンカイ、イラリンドー。」と、私を励まし抱き起こしました。そして、両親に支えられながら糸満のとある部落にたどり着きました。

気がつくと、私の手首は、落下した衝撃により複雑に骨折したらしく、3倍くらいに腫れ上がっていました。とりえず、病人やケガ人をアメリカ兵が診療治療を行っていたので、そこに行きました。言葉の通じない彼は、身振り手振りで「あなたの手が動かないのなら切断する。」と言ったので、おびたしい医療器具を目の前にして驚いた私は、力を振り絞ってわずかに指先を動かして見せると「OK大丈夫だろう。」という素振りでホッとしました。しかし、そこでちゃんとした治療が施されなかったため、私の右手は今もなお不自由です。

その日のうちに私たち家族は、トラックで石川の捕虜収容所へと送られました。それから1ヶ月あと、身重だった姉がいよいよ出産となった日、母に産婆を探してくるように言われたのですが、ただオロオロするばかりで途方に暮れて帰ってくると、母が赤ん坊を取り上げた後でした。そして、もっと驚いたことに母が一本の経節を手にしていたことでした。産後の娘と赤ん坊のために、誰にも言わずに大事に大事に隠し持っていたのです。何もない収容所の中、栄養豊富な経節の汁で赤ん坊も無事に育っていきました。子や孫を想う母の愛情の深さをしみじみと感じたものです。

戦後の今は水道、電気、食べ物も何でもあり、あって当然の豊かな世の中ですが、もしも戦争が勃発したならばどのような暮らしになるのでしょうか。

あの時のことは、74歳になった今でも忘れられません。15歳の少女が着の身きのままの中での生活。芋を掘り背負い、薪を拾い集め火を熾し、水を汲みその日1日を生きるだけで精一杯でした。あのような悲惨な体験は誰にもさせたくはありません。

戦争は絶対反対です。皆で世界平和を願いましょう。

戦争体験証言集「平和への証言」は西原町立図書館でご覧いただけます。